

日本古典文學大系 66

連歌論集
俳論集



岩波書店刊行

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

日本古典文學大系 66

連歌論集
俳論集

木藤才藏
井本農一
校注

岩波書店刊行

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

連歌論集 俳論集

日本古典文学大系 66

1961年2月6日 第1刷発行 ©
1978年6月30日 第18刷発行

定価 2300 円



校注者	き 木 井	どう 藤 もと 本	まい 才 の 農	ぞう 藏 いち 一
発行者	緑	川	亨	

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

落丁本・乱丁本はお取替いたします

監修者

時麻久西高
枝生松尾木
誠磯潜市
記次一實助

題
字
柳
田
泰
雲

大東急記念文庫藏

素素約
 光師評外人の語を以て其の第一
 世に於ては其の語を以て其の第一
 匡の語を以て其の第一
 中一の語を以て其の第一
 素素約

目次

連歌論集

解説		五
凡例		三〇
連理秘抄		三三
筑波問答		三九
十問最秘抄		一〇七
さゝめこと		一二九
吾妻問答		二〇五
補注		三九

俳論集

解説……………二七

凡例……………二九

去來抄……………三〇

先師評……………三〇

同門評……………三六

故実……………四七

修行……………三九

三冊子……………三九

白雙紙……………三八

赤雙紙……………三七

わすれみづ(くろさうし)……………四〇

補注……………四五

連
歌
論
集

木
藤
才
藏校注

解 説

一 連歌の世界

連歌は中世社会の形成と歩調を一にして形成され、中世社会としての特色のはっきり出てきた南北朝期から室町中期にかけて完成された。その間に、公家・武家・僧侶・一般庶民を問わず、あらゆる階層の人々に愛好された。また、地域的に見ても、西は九州のはてから、北はみちのくの奥まで、辺土の人々にまで、もてあそばれた。しかし、社会の体制が中世から近世へと移行するにつれて、俳諧にその席をゆずって、次第に行なわれなくなったのである。このようにみると、連歌は中世とともに発生し、中世とともに亡んだ典型的な中世詩であることに気づくであろう。中世の人々が自己の詩心を、もっとも純粋な形で結晶させるために生み出した詩形式、それが連歌である。

古代の文学が多分に情的であるのに対して、中世の文学は、精神的だという事がいわれているが、われわれの祖先が、深く広く澄んだ精神の世界を発見したのは、実に中世においてであった。この深く広く澄んだ精神を詩として形象させるために、中世の詩人たちが、どのように苦闘したかは、中世期に成立した和歌や連歌の学書をひもといてみると、はっきりするのである。中世の歌論や連歌論が、終始、心と詞の関係を問題にしているのは、このためである。殊に、中世芸道論の最高峰ともいえるべき心敬の連歌論などにおいては、心のあり方そのものがまず問題にされ、さらに、その心をどのように詩として形象するかが問題にされ、それと同時に、自分の心と人の心とが、どのように深く響き合い、匂い合うかが問題にされた。それは、普通の詩論とは、はなはだしくかけ離れている事を論じているようであって、その

実は、今日的な問題に深い示唆を与えてくれているのである。しかし、こうした連歌作家たちの深い思索と体験の記録も、われわれには相当にわかりにくいものになっている。というのは、連歌そのものが遠い世界のものになっているからである。それは、連歌が現在ほとんど行なわれなくなっているという事だけでなく、詩としての発想法も、制作の過程も鑑賞の仕方、何もかもが、われわれが持っている詩という概念とかけ離れているからである。

それでは、連歌とは、いったいどういう性格の詩なのであろうか。連歌論について論ずる前に、まず、そのことについて考えてみよう。連歌はその形式を一見したところ、非常に長大なのが目につく。五七五の発句に始まり、七七の脇句でそれを受け、さらに五七五の第三句に転じ、以後、七七と五七五の句を交互に連ねて、百句に至るのを原則とする。なかには、五十句や四十四句や三十六句で終わる場合もあるが、その場合でも、万葉集中の長歌に匹敵するだけの長さを持っているのである。この長大な詩は、原則として多人数で合作する事をたてまえとしているが、全体を通じて何らまとまった事柄をも、一貫した詩情をも表現していないのである。むしろ、一句ごとに句境が移っていく点にその生命がある。それに、発想の仕方からいうと、場にはなだしく制約されているのが特色である。発句の場合には、その句のよまれる時節や時刻や所の制約を受けているし、付句の場合には、前句に制約され、さらに一卷全体の布置結構に制約されている。しかも、一卷全体の布置や構想は、同一の事をくり返さずに、絶えず変化をつけていくという点を中心にして、配慮することになっている。

さらに大きな特色は、制作と鑑賞が密接に結びつき、制作と鑑賞を交互にくり返していく過程にのみ意味があるという事である。すぐれた句を生み出すためには、他人の句を十分に鑑賞し享受することが前提になるのであって、連歌一卷の制作を終えた時には鑑賞も同時に終わるのである。こうした詩的体験は何にたとえたらよいであろうか。それは、洗練の極、ほとんど芸術にまで高められた、サロンにおける高雅な会話にたとえる事ができるかも知れない。あるいは、

言葉と言葉のイメージがかなでる一編の交響楽、参加者一同で作曲し演奏し、自ら奏しむ即興音楽にたとえることができるかも知れない。という事は、連歌は、自分で制作し鑑賞する過程を通じて、参会者一同の心が響き合い鳴り渡り、その結果として、美しい印象がきざみつけられていく所に生命のある芸術だという事なのだ。この点について、水無瀬三吟の表の数句をとって説明してみよう。

雪ながら山本かすむ夕べかな 宗 祇

行く水とをく梅にはふ里 肖 柏

川風に一むら柳春見えて 宗 長

舟さす音もしるきあけがた 祇

この百韻は、後鳥羽院の二百五十年忌にあたる長享二年（四八八）の正月二十二日に、水無瀬廟に奉納するために詠まれたものだという。頃は、旧暦正月二十二日のことであるから、かつて後鳥羽の院が水無瀬の離宮から見渡された山々の峰には、雪がまだ残っており、その山麓のあたりには春の霞がたなびき、風趣もひとしおであったと思う。会に臨んだ宗祇の心の中には院の「見渡せば山もと霞む水無瀬川夕べは秋と何思ひけむ」という御製の心とともに、その季節、その所の本意にうらうちされた美しい幻想が、あざやかに浮かびあがってきたことであろう。かくして、宗祇の「雪ながら山本かすむ夕べかな」の句が形象されたのである。この発句がよみあげられ、一座に同席した肖柏と宗長の二人の心に句の意味が理解され、宗祇の心が伝わっていく。やがて、宗祇の句に照応する世界、すなわち、山の麓のあたりから遙かに流れ出てくる一筋の春の川と、そのほとりの梅咲く里のイメージが、肖柏の心の中に浮んでくる。「行く水とをく梅にはふ里」の句がよみあげられる。他の二人の心に、句の心が伝わる。宗長の心の中に、川ぞいの一むらの柳の姿が見えてくる。川風がゆるやかに吹き、柳の枝がわずかに緑をひるがえす。前句の静かさに、かすかな動きが点ぜられ、

宗長の世界がひらけてくる。「川風に一むら柳春見えて」の句が形象され、よみあげられる。他の二人の心に、この句の世界がしみとおる。やがて、宗祇の心に川舟のさおをさす音がはっきりと聞こえてくる。というような過程が、連歌一般の制作方式である。

近世以後、連歌にかわって流行した俳諧も、制作と鑑賞とをくり返していく所に興味の中心があった点では、連歌と全く同じ性格の詩である。ただ、連歌が幽玄や有心や長高きことを理想としたのに対して、俳諧は、わびやさびや軽みを理想とし、その用語を歌語だけに限らずに、俗語的なものにまで広げた点だけが違っているのである。

二 連歌の形成

連歌の詩形式が一応の完成をみたのは、南北朝期に入ってからである。平安末期に鎖連歌が発生し、鎌倉初期に式目の芽生えらしいものを成立させてから、応安五年（三七二）に連歌新式が制定されるまでの間には、約二百五十年の歳月が流れている。この二百五十年の間に、中世社会は前進と停滞とを何度もくり返しながら形成されていた。連歌もそれと歩調を合わせるかのように徐々に形成されていたのである。まず、鎌倉幕府の成立する前後から承久の変に至る期間に、俊成と定家の親子を中心とする歌人たちによって、中世的な心情を短歌形式で表出する事の可能性が摸索され、余情表現の技法が完成された。この古代和歌の革新は、連歌の詩的形象化を可能にしたのである。そのころ、後鳥羽院の御所では、しばしば連歌会が催され、その会には、定家・家隆・秀能・雅経・家長その他の新古今歌人が参加していた。この新古今歌壇の中心人物であり、中世和歌の理想をうちたてた定家は、和歌より連歌に熱中して、その晩年を過ごした。定家の子の為家も、為家の子の為氏も、連歌の名手として聞こえていた。また、為家や為氏を中心とする宮廷歌壇においても、連歌がたいへん愛好されていた。このようにして、鎌倉期の中頃、後嵯峨院の御代の建治の頃には、

応安の新式の原形になるような式目が成立していたのである。

その頃になると、連歌は庶民層の間にも相当に普及していたようである。良基の記すところによれば、道生・寂忍・無生などという僧体の連歌師が、よろずの者を集めて、法勝寺や毘沙門堂の花の下で連歌の会を催したという。その時の句のいくつかは、『菟玖波集』の中にも収められている。鎌倉中期から末期にかけて、この地下連歌は京都を中心にする近畿の各地方だけでなく、東国の各地方にも、また、その他の地方にも、急速に広がっていった。このようにして、鎌倉時代の末期には、京都だけでなく、東国の中心都市である鎌倉などにおいても、花の下で連歌会は、年中行事の一つになっていたようである。

そのうちに時世は急転した。北条氏が滅亡し、建武の新政府が樹立された。東国武士が大挙上落して、京都は異常な混乱と活気に見まわれることになった。その当時の世相を諷刺した、二条河原落書の中の「京鎌倉ヲコキマゼテ、一座ソロハヌエセ連歌、点者ニナラヌ人ゾナキ」という一節は、あまりにも有名である。連歌はもともと閉されたグループの遊興であったから、仲間うちで自分たちだけに通ずる法則を用意しておけば、それでこと足りたのである。しかし、京都でいえば、春の花の盛りの頃、法勝寺や鷲の尾の花の下で連歌会が開催される時には、花の下で宗匠の指揮に従って制作されなければならなかった。ここに、小さなグループの約束を越えて、やや公的な法則を必要とする理由があった。このようにして、京都では京連歌の式目が、鎌倉では鎌倉連歌の式目が成立した。京連歌の式目としては、まず、本式が制定され、つづいて新式の誕生をみた。鎌倉末期には、そのいずれもが並び行なわれながら南北朝期を迎えたのである。したがって、建武中興以後に、東国武士が多数上落して、鎌倉連歌の風を伝えてからは、京都の連歌界は、『連理秘抄』に、「上古・中古・当世、鎌倉・京、本式・新式、色々様々にしかへたり」というような、極めて多様なものになった。しかし、連歌にうち興ずるグループごとに法則を異にするという事は、不便なことなので、公的な法則を求め

る声も強くなってきたものと思う。建武中興以後約十六、七年を経た貞和の末年には、建治の新式が広く用いられていた。これは、当時の有力な連歌師であった救済などによって、建治式が支持されていたためであろう。救済を師としていた良基は、この建治の新式をよりどころとして、式目の統一をはかったのである。

鎌倉初期の宮廷連歌においては、賦物を句ごとに詠みこんで、それで全巻の統一をはかっていた。また、前句と付句の関係は、一首の和歌をよむ呼吸で付けられていた。鎌倉中期以後の地下連歌においても、賦物は相当に重んぜられていた。しかし、句と句の連接にあたっては、句々によりこまれる素材相互の関係が次第に重視されるようになった。こうした素材を寄合といっているが、本式連歌や鎌倉連歌では、この寄合で前句に確実に付け、寄合中心に句を仕立てることに意を注いで、生硬な表現の句が多かったという。ところが、建武以後の地下連歌の享受層の中には、足利尊氏や佐々木導誉のように地方豪族から急速に上層階級に成り上っていった者たちがいた。彼らは北朝方の公家たちと極めて密接な関係を保ち、その文化や教養を身につけようとしてあせっていた。こうした享受層の支持を得ていたのが、新式連歌による連歌師たちで、その頂点には救済が位置し、その背後に良基がいた。この良基にとって、地下連歌の面白さを失うことなく、これを芸術的に高めていくことが当面の課題であった。そのためには、万葉集以下の歴代の歌集や伊勢物語・源氏物語などの王朝物語、詩経以下の中国の古典の摂取が必要であった。また、中世詩としての連歌の理論の完成のためには、『古来風体抄』や『八雲御抄』などの歌学書の他に、当時、新しく中国から渡来して、知識人の間にもてはやされていた『詩人玉屑』の所説を借りる必要もあったのである。

三 良基の連歌論

良基の所説の中には、連歌の本質論を初め、表現論・用語論・修行論・会席論その他、連歌に関するあらゆる問題が

含まれている。ここでは紙数の関係でその全貌を紹介することができないので、大事な点だけに触れていくことにしよう。良基は、連歌は当座の逸興を催すためのものであると考え、その点に連歌の特性の中心を置いていた。その場で十分に楽しむことができれば、それで連歌をよんだ目的は達成されるというのである。『筑波問答』の中に、「連歌は前念後念をつがず。又盛衰憂喜、境をならべて移りもて行くさま、浮世の有様にことならず。昨日と思へば今日に過ぎ、春と思へば秋になり、花と思へば紅葉に移ろふさまなどは、飛花落葉の觀念もなからんや」と述べていることは、あまりにも有名である。句の世界に没入し、句境が進展するにつれて、せつなせつなに参会者の心境も、際限もなく変転していく面白さは、和歌の制作では味わうことのできないものに違いない。連歌はあくまで当座の興を催すためのものであるが、制作に熱中して、時の移るのを忘れる所に、大きな意味があったのである。こうしたすぐれた連歌の体験をするためには、参会者の質が大事であった。達人たちが一堂に会して、その道の先達の指揮のもとに、「同心の思ひ」をなすことが必要であった。また、よい場所に会席を設ける事も望ましい事であった。「一座を張行せんと思はば、まづ時分を選び眺望を尋ぬべし。雪月の時・花木の砌、時にしたがひて変はる姿を見れば、心も内に動き言葉も外にあらはるゝ也。おなじくは、眺望ならびに地景あらん所を選ぶべし。山にも向ひ水にも望み風情をこらす。尤も其の便りあり」(『連理秘抄』)と述べているように、すぐれた環境の中から、すぐれた句がおのずと生れ出てくると考えていたのである。

一卷の制作に当っては、発句がまず大事であった。よい発句とは、深い詩心がこめられており、言葉はやさしく、気高く、新しく、その席の作法にかなっているようなものでなければならなかった。一卷の構想に関しては、「一の懐紙の面の程は、しとやかか連歌をすべし。てにはも浮きたる様な事をばせぬ事也。二の懐紙よりさめき句をして、三・四の懐紙をことに逸興ある様にし侍る事なり。楽にも、序・破・急のあるにや。連歌も、一の会紙は序、二の会紙は破、三・四の会紙は急にてあるべし」(『筑波問答』)といっている。連歌一卷の展開に、音楽と同じく序破急の構想を見出した良基